ふるさとの鼓動
北に生きる心
むすんで

こぶし

第 131 号　　２０１０年１月１日発行
発行責任者：横井正人　　編集：機関紙局
特定非営利活動法人 民族歌舞団こぶし座　　北海道函館市陣川町 122-172
TEL/FAX:０１３８－５４－２８５９　　年２回発行
E-mail:kobusiza@wing.ocn.ne.jp　　http://www18.ocn.ne.jp/~kobusiza/

主な内容

（１）新年のごあいさつ
（２）一般公演の取り組みから
（３）韓国民族芸術団との交流
（４）お知らせ

謹賀新年

本年もどうぞよろしくお願い致します

二〇一〇年　元旦

特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）
民族歌舞団こぶし座社員一同

（金城公雄・絵）

理事長　横井正人（座員）
理事　中尾雄児（座員）
理事　計良　徹（座員）
監事　金城公雄
計良正子（座員）
横井ひとみ（座員）
松岡智恵美（座員）
田畑悟志（座員）
村田さつき（座員）
橋本かおり（職員）
岩島　司
岡部幸人
梶原康男
國田修司
西東英範
志賀松　晋
志賀松智恵美
古川喜美子
三浦恒雄
三浦芙美子

新年のごあいさつ

理事長　横井正人

新年あけましておめでとうございます。

昨年賜りましたご支援に心からお礼申しあげます。

お陰様でみんな元気に新年を迎えることができました。

昨年は、不況の嵐をまともに受けた厳しい一年でしたが、全座員がフル回転で全道各地を駆け廻り、沢山の方々のご協力を得ながら様々な活動を展開してきました。

私も初めて、講演をする機会を得ました。

札幌でお世話になっている先生からの依頼で、小学六年生の総合学習の時間に『働く』をテーマに話すことです。

百人の児童と向き合い、入座のきっかけや公演先で出会う人達とのこと、芸能の楽しさや舞台の裏話など仕事としての喜びを語りました。いつしか真剣な眼差しに吸い寄せられ、夢中になって話す自分に気づき、彼らの持つエネルギーにすっかり魅せられてしまいました。未来を担う子ども達にこそこの仕事を通し、夢と希望を伝えていきたいと痛感しました。

もう一つは、韓国の「クンドゥル文化芸術センター」を訪れたことです。民族の悲願である祖国統一を願い活動している芸術団に触れ、深い感動と大きな励ましを受けました。

今の時代にあって、こぶし座は何をすべきなのか―。

奇しくも「韓国併合」百年を迎える今年、日本各地でクンドゥル公演が行われることは歴史の必然なのかも知れません。

変革を求める民意によって新しい政権が誕生した我が国では、いまだ明るい展望は示されず閉塞感が渦巻いています。今こそ「生きる喜び・働く誇り・明日への夢」を多くの人々と語り合い、共感の輪を広げなくてはなりません。いままで以上に努力を重ね、時代に即した新しい座のあり方を模索しながら展望を切り開いていきたいと思います。

創立45年を迎える今年、皆さんへのさらなるご支援とご協力をお願いして、新年のごあいさつといたします。

昨年の一般公演は、舞台形式のものとフロア形式（芸能ひろば）のものを合わせて33回実施しました。

その中から、胆振管内のむかわ町公演を紹介します。

『感動・希望・夢舞台』を合い言葉に心に響く舞台をみんなで創ろうと奔走した、現地事務局の中井さんから想いを寄せて頂きました。

約束の公演

むかわこぶし座を観る会
事務局　中井ひろし

開演の幕が開く。民衆の息吹が盆踊りにこめられた三本柳さんさ踊りに、会場から早くも温かい拍手がわいた。横井正人代表に出会ってから1年3ヶ月。ようやく約束を果たした安堵感と共に、私は大きな失敗をしていた。

11月半ばを過ぎても200枚。目標枚数にはほど遠かった。事務局としては、みんなに券売りに集中してもらいたかった。真剣になればなるほど、心のゆとりのなさがあらわになり、皆に不快感を与えたに違いない。

私は幾たびかの公演を通して、1枚の券の重さと、成し遂げなければならない責任は体験してきたつもりだ。為し得た後はみんなわかる。ひとつになれる。公演実施を決定するのは地元の人たち。その出会いの扉を開けるのはこぶし座の人たち。

横井さんたちは40年以上の長きにわたり地域の人たちの心を開き続け、本番には心血を注ぎ人々に感動を与え続けてきた。その大きさに比べ私は60歳を超えても、未だに人とのコミュニケーションがうまくとれていない。

小学生の感想文で「たいこや、ししまいがとてもうまくてびっくりしました。今までいちばんおもしろかったです」喜びを率直に表現していた。大人も多くの人が「感動をありがとう」と感謝の言葉を記している。

観る会メンバーの皆さんと

私たちを育んでくれたふる里は今、過疎化を通り越して、耕作放棄地になっている所もある。目を閉じると村祭りや、自慢の伝統芸能の笛や太鼓の響きが聞こえ、父や母、兄弟姉妹が歓声を上げ、ただ真っ直ぐに未来を見つめていた時代が、浮かんでくる。

むかわこぶし座を観る会19名は2009年11月23日公演を成功させた。

むかわ町民に素晴らしい伝統芸能を披露して頂いた横井正人さん、計良正子さん、松岡智恵美さん、田畑悟志さん、村田さつきさん。そして演技者を支えたスタッフの計良徹さん。アンコールの拍手の中で、私は観る会の人たちに感謝してもしたりなかった。

公演を終えて「むかわの人たちの温かさで、心地よく演ずることが出来た」と出演者は口を揃えた。

厳しい時代だからこそ忘れてはならないことがある。

夢と希望。諦めなければ夢は必ず叶う。

それを教えてくれたのが「こぶし座」だ。

国内はもちろん、海外の一級の音楽家を例会という形で取り上げ続けている全国的な鑑賞組織「労音」・川越音楽鑑賞協会と東京労音に取り上げていただき、久しぶりに本州での一般公演が実現しました。

二日間にわたり公演した川越市での様子を、主催事務局の室原さんの感想寄稿と座員・村田の報告でお伝えします。

こぶし座を取り組んで

川越音楽　室原信之

「こぶし座」を7月16日、17日に「やまぶき会館」で公演しました。公演を観た会員たちは、最初から集中して拍手、手拍子、かけ声が出て、とても暖かい雰囲気の公演でした。「獅子舞の獅子がかわいかった」という感想が多かったです。

そして特に、太鼓など鳴り物は力強く、びんびん響いて躍動感があったこと、司会の人の語りや進行も好評で、伝統芸能の素晴らしさを伝承して40年以上続けて来られた実力を痛感したこと、元気をもらった、日本の宝ですと感動の声が寄せられました。

また、この公演でリクエストした「江差のもちつきばやし」は川越音楽役員と一緒に舞台に立って演じました。公演2ヶ月前にマットさんが練習のため、遠い函館から駆け付けてくれて一生懸命の指導で役員たちをひとつにしてくれました。公演では観てくれた会員たちが最初から手拍子で「江差のもちつきばやし」を迎えてくれて、最後の「餅まき」は皆さん喜んでくれて最高に盛り上がりました。

そして「これからも日本の地方に伝わる芸能を掘り起こして伝えて行って下さい」との期待の声も寄せられました。

また、「こぶし座」の方々と直接交流することができました。

私達はコンサートとか公演を主催する立場で運動に取り組んでいますが「こぶし座」の方々と触れ合って「仲間」を感じました。これからもがんばってください。

川越市公演

村田さつき

かつて「小江戸」と称された歴史いきづく川越市で、実に25年振りとなる公演が実現しました。

武州労音の一つである川越音楽の皆さんに暖かく迎えられ、力いっぱい全力で舞台をつとめることが出来ました。

津軽海峡をフェリーで渡り、青森から高速で川越に向かう道すがら何度もよぎった不安と緊張も、公演中の手拍子や掛け声でどこかへ吹き飛んでしまいました。何よりも熱心に見てくださる会員の皆さんの気持ちをうれしく思いました。

そして、なんと言っても『秩父屋台囃子』の本場での公演。何度も沸き上がる拍手に郷土の芸能に寄せる想いの深さを肌で感じました。

また、演目の最後の川越音楽の役員による『江差のもちつきばやし』は、これ以上ない盛り上がりを見せ、このことに、これまで準備してくれた役員の方々がとても喜んでくれました。民族芸能を介して心を交流させ心を結び合っている。なんて素敵な光景だろうと思いました。

あっという間の2日間、ここで出会い交流した方々との楽しい思い出を胸に、今年もよりよい舞台を目指して頑張りたいと思いました。

歴史情緒漂う街並み

昨年の八月二十日から二十三日にかけて、座代表の横井が韓国の「クンドゥル文化芸術センター」を訪れました。
これは、こぶし座社員の梶原康男さん（はこだて音楽鑑賞協会事務局長）の働きかけによるもので、全国労音交流団の一員として参加したものです。
この二月、はこだて音楽鑑賞協会が例会として取り組む「クンドゥル」とこぶし座への想いを梶原さんに伝えてもらいました。
また、「クンドゥル」の公演を観覧してきた横井の報告も記載します。

楽しみなこぶし座とクンドゥルの交流

2月26日・27日の両日、はこだて音楽鑑賞協会の例会で韓国民族芸術団クンドゥルの公演が函館市芸術ホールで開催される。クンドゥルの来日公演は２００８年についで２度目となり、全国労音が招聘する。今回の来日公演にあたって、昨年8月全国労音の交流団が派遣され、函館からは、音鑑会員でもあるこぶし座代表の横井正人さんに参加してもらった。

クンドゥルは１９８４年の創立で25年になるが、こぶし座の45年に比べ歴史は比較的浅く、団員の年齢も若いが常勤団員が33人もいる（当然、仕事をしながらの準団員も多数いる）。これだけでも大いに興味がわく。本部が慶尚南道の晋州（チンジュウ＝釜山から車で2時間ほど）にあるが、そのほか3カ所に拠点（事務所）があり、地域に根ざし、共同生活をして全国を公演している。まさしくこれはこぶし座そのものである。

函館公演が決まった時点で、クンドゥルとこぶし座が交流できればお互いに得られるものが大いにあると考え、横井正人さんの交流団派遣をお願いした。クンドゥルの来函時には、こぶし座と交流し、こぶし座会館に宿泊もしてもらいたいと思っている。交流には会員も準備から一緒に参加できるようにしたい。会員にとっても刺激的な数日になりそうだ。

韓国のクンドゥルと日本のこぶし座、ステージだけでなくどんな交流ができるか楽しみである。

はこだて音楽鑑賞協会
事務局長・梶原康男

「クンドゥル」公演を観覧して…。

8月、全国労音の交流団にはこだて音鑑の代表の一人として加わり、山清（サンチョン）市の芸術文化会館で行われたリハーサル公演を観た。

日本での公演のために特別に準備された内容で、第1部は農楽用の楽器、チャング・プク・チン・ケンガリ・テピョンソ（2枚リードのラッパ）による演奏、民謡や伝統的な語り物パンソリで、休憩をはさんで第2部はマダン劇「順風に帆を揚げて」だった。

第1部では、韓国伝統のリズム・メロディーが音と共に、演奏者自身の身体全体からも伝わってきた。気が付くと自分自身の心も身体も一緒に踊っていた。

休憩後、第2部の幕が上がる。舞台の左手奥に船らしき大きなセットがある。

マダン劇「順風に帆をかけて」

「プンムル・パングッ」

この劇は、国が分断されて離散した家族が再会するまでを、風刺と滑稽を交えて描いた作品で、舞台上の船は平和な国、平和な村の象徴でもある。他に目立った舞台セットが無いシンプルな舞台だが、演技者によってドラマティックに描かれた。

物語の内容に引き込まれ、あっという間の1時間。最後には主人公トゥマンとボックスン夫妻の再会に涙している自分があった。

クンドゥルの函館での公演は2月。公演はもちろんのこと、メンバーとの交流も楽しみである。寒さを吹き飛ばすような熱い気持ちで迎えたい。

こぶし座代表
横井正人

今年度の公演の特徴として、保育園・幼稚園での公演があげられます。ここ数年の実施個所としては最多となる、28ヵ所での開催となります。

特に、10月におこなった北見市での公演は、市立の全ての保育園（所）の子ども達に観てもらう事ができました。

四年ぶりに取り上げてくださった担当の方より、感想を寄せていただきましたのでご紹介します。

「こぶし座公演を見終えて」

北見市立とん田保育園
園長　川合鈴子

北見市立保育園の入園児童を対象にした観劇は、これまでにも回数を重ね、生の劇を直接観る体験を得ることにより、豊かな感性を磨き、心豊かな子ども達を育てたいとの願いから例年実施しております。

こぶし座公演は、以前にも公演依頼をした経過があり、もう一度、全道各地の公演で伝承されている歌や踊りを、子ども達に是非体験させたいとの思いから検討を進めてまいりました。

今回、市立保育所6ヶ所で、午前・午後に分かれて地域の保育園への呼びかけも行い、たくさんの子ども達が集い、幼児向けの公演を楽しむことができました。

とん田保育園は、0才から5才児までの子ども達が、今始まるかと、みんな目をキラキラさせて舞台を待っていました。お腹に響く力強い太鼓の音、笛の素敵な音色、しなやかな踊りと、子ども達の目が1点に釘付けになり、自然と子ども達から、感激の拍手がわいてきて、子ども達の中にある確かなものを見たように思います。最後の獅子舞は特に低年齢児は、ビックリ!?ワーッと言っていなくなってしまいました。

でも怖さの中に、見てみたい気持ちもあって、元気にいられますようにとの願いから、子どもひとりひとりの頭をくわえてもらうことができました。

私たちにとっても、何故か懐かしい思いを掘り起こしてくれるような、子どもも大人も、次に生きていく力がからだの中にわきあがってくるような、すてきな公演でした。

またどこかで、お会いすることが出来たらと願っています。

こぶし座では、地元に根ざした小規模の公演を意識的に実施していますが、昨年は、学校が夏休みに入った時期をねらって、函館市内の二か所（花園地域・西部地域）で、親子で楽しんでもらう地域公演を行いました。

西部地域公演の様子を、学童保育所指導員・高田恵美子さんに寄稿していただきました。

西部地域で こぶし座公演

こぶし座を観る会　高田恵美子

7月25日(土)、西別院さんのご厚意で立派な「文化会館」をお借りしての「こぶし座」公演を行いました。心配した雨もあがり、会場には予想を超える200名近い観客で熱気にあふれました。

地域の方々、福祉施設の方々そして6か所の学童保育所の子どもたち、指導員、保護者が「3か所の学童保育所による実行委員会」の呼びかけに徒歩、バス、車の乗り合わせなどで駆けつけてきてくれました。

なかには、松葉杖の方や孫の幼児を連れた方々の姿もありと「子どもからおとしよりまで」の地域公演ならではの幅広い年齢層の参加でした。

玄関前に設けられた受付では、学童保育所の子どもたちと指導員が笑顔で「いらっしゃいませ」と迎え、和やかな雰囲気で開幕となりました。

7演目と交流で、こぶし座と会場がひとつになった1時間でした。

たくさんの方からのアンケートには、「地域で見ることができてよかった」「子どもたちのキラキラした瞳と舞台に引きこまれている明るく元気な姿に励まされた」「初めての舞台ですが座の皆さんの笑顔と表情のファンになりました」「また見たい」「またやってほしい」の声が寄せられました。

今回の実行委員になった学童保育の若い指導員は「こぶし座を見るのは初めて」という不安を「子どもたちに伝統芸能の良さ、力を体験させたい」という想いに変えて取り組みましたが、「子どもたちの姿に教えられた」と公演を振り返っています。

準備期間2か月で公演を成功させることができたのは、こぶし座のこれまでの活動実績と援助があってのことです。あらためて「こぶし座」のファンになりました。

「アイヌ文化フェスティバル2009」

（09・9・26　苫小牧市）

アイヌ文化賞贈呈式・講演「夫、知里真志保」萩中美枝さん（日本口承文芸学会会員）・アイヌアートプロジェクトの楽器演奏・千歳アイヌ文化伝承保存会のアイヌ古式舞踊と3時間半に渡る盛り沢山の内容が行われた。

アイヌ文化の伝承、保存及び振興のため、長年にわたり尽力されてきた方々の功績をたたえての贈呈式。

「私のような者がこのように立派な賞を頂けるなど、夢のようです。厳しい時代を乗り越えアイヌ文化を守ってきた先輩たちのお陰、感謝の気持ちで一杯です。これからを担う若いみなさん、どうぞ、アイヌの精神をしっかりと受け継いでいってください。」

文化賞を受賞した81歳になる遠山サキさん（浦河町在住）が、優しい笑顔でお礼の言葉を述べた。

30数年前、浦河町の生活会館で初めてアイヌの唄や踊りを教えていただいた時のことが蘇り、サキさんの文化伝承に追悼の想いを託した。

故・川瀬氾二 アレン＝ネルソン追悼 第45回記念 矢臼別平和盆おどり大会

「故人を追悼し、生き様を偲び、その意志を継ぐ決意を込め、盛大に矢臼別平和盆おどりを成功させましょう！」

矢臼別の大地に深い黙祷を捧げ、開会集会が始まった。

挨拶があり、報告や決意表明に拍手が湧く。いつも通り、まるで川瀬さんが舞台の上に居るかのように…。

私たちは新盆の供養にと「三本柳さんさ踊り」（岩手県旧南部藩領に伝わる盆踊り）に込めた深い愛情と、歩み続けて来られた日々を想った。

お世話になった娘の悦子さんにもお会いでき、お孫さん共々親子3代に渡っての活躍ぶりを聞き励ましを受けた。

舞台で繰り広げられるお話や音楽・歌や踊りは、喜びと誇りに満ち溢れ、楽しい交流が次から次へと続いた。

苦難の歴史を強いられながらも、命がけで守り育ててきたアイヌ民族の精神文化が、今こそ美しく花開き、「人間らしく生きよう！」と私たちに呼びかけているように想われた。

…学び、深める…

「人間らしく生きる」ということ

二つの大きな集会に参加して

夜空に打ち上がる花火の美しさに、遺族の悲しみが重なり涙がこぼれた。

静寂を打ち破り、かがり火が点火されて笛と太鼓が鳴り響き、いよいよ平和盆踊りが始まった。仮装を施しプラカードまで持った踊り手たちの輪が、二重三重にと広がっていく。

かつて百姓一揆に向かう農民たちが闘うエネルギーを蓄えたように、平和への願いを込めた盆踊りがいつまでも続いた。

ステージ交流では、沖縄をはじめ全国から駆けつけた仲間たちのパフォーマンスが次から次へと行われ、心が一つに結ばれていった。

平和を願い、人間らしく生きる権利を主張し、闘い続けた川瀬さんの遺志は、しっかりと全国の仲間たちに受け継がれ広がっていることを確信した。

連帯することの素晴らしさ、誠実に生きることの尊さが胸にしみた。

（09・8・7～9開催）

【一～三月の公演予定】

《一般公演》

1／16　東川町

2／13　福島町

14　七飯町大沼地域

16　東神楽町

20　江別市

21　千歳市向陽台

23　砂川市

3／6　旭川市神楽岡

7　愛別町

《保育園公演》

1／12　桔梗保育園

13　青い鳥保育園

14　第二港保育園

15　つぐみ保育園

17　小樽かもめ保育園

2／1　栄町あおぞら保育園

2　大曲はだかんぼ保育園

救世軍桑園保育所

3　北の星白石保育園

菊水上町保育園

4　川沿保育園

5　かっこう幼稚園

12　八雲国の子保育園

《特別公演》

1／2　棒二森屋初売り

10　丸運労組50周年

11　函バス労組新年会

【お詫び】

前号の機関紙の発行号数を、誤って第128号と記載してしまいました。正しくは、第130号でした。大変申し訳けございません。